



Title	変わった服をきてみよう
Author(s)	本間, 直樹; 高橋, 綾
Citation	臨床哲学のメチエ. 2003, 11, p. 12-15
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/8079
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka



4月23日 変わった服を着てみよう(本間+高橋)

ついあえず高校生にわかるよついで「変わった服を着てみよう」とタイトルをつけてみたが、この回では(難しく言えば)衣服を他人との関係や自己関係のメディアとして捉え、具体的にどんな服を着るかということ=他人への関わりかたや自分(の見た目、自己イメージ)とどんな関係をとるかといつことについて生徒達に考えるきっかけを持つてもらおうと考えていた。また衣服が単なる個人の選択には留まらず、社会とのつながりを持つということ、とくに衣服が「ジエンダー」、男らしさ、女らしさとの関わりを持つということについて、具体的な事例 講師がなぜこんな「変わった」服を着るようになつたかというちょっと恥ずかしい? ? 経験談 を通して、すこしでも気づいてもらえれば、といつ思いもあつた。

その前の回(鷺田+百々)では服について生徒にいろいろ話してもらつたが、自分の考えることについてみんなの前で話すところことが想像以上に生徒達にとっては大変なことのようだったため、今回は(生徒に発言をさせる方式ではなく)話し手自身の経験を服を見せつつ話すという形式にしてみた。あとは彼らに実際に服を着てもらおうというのがメインの課題で、それもいろいろ言葉で考えるよりも、実際に「変わった」服を着てもらうだけなら、それほど難しいことではないし、じかに感覚を感じてもらえるかな、という程度のことをもくろんだものだった。

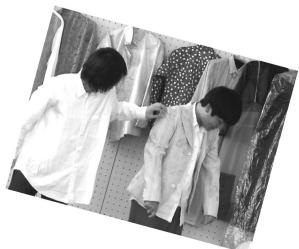
服が下げるられるとこつことで体育館を借り、高橋、本間両名が(研究室の卒業生で、我々の愛好する某ブランドに就職なつた栗山さんの協力も得て 栗山さんありがじハジヤいました)授業の構成は、いろいろへんてこな服

を生徒達の前にフリマのように広げてはつり上げるというパフォーマンスをつかみとして、希望する生徒にその服を実際に来てもらい、その後は本間、高橋による「私はなぜ変わった服を着るようになったか」話をそれぞれ十五分程度。こう書くとかなりふざけた（マニアックな？）企画だが、我々講師一人は上ののようなテーマのもと、「ジェンダー」というテーマを高校生の彼ら自身に関係あることとして身近に感じてもらったりには、話し手（講師）が彼らと同じ年齢くらいの頃からどんなことを考え、どんな服を選んだかという「ストーリー」として聞いてもらうのが一番いいのではないか、ということをそれなりに真剣に考えていたつもりである。

持ち込まれた服にも、感嘆というよりは奇異なものを見る眼差しが注がれていたようにも思うが、一応いろいろ見入っており、話も（予想よりは）まあまあ聞いてもらえた。話し手の感触としては、一部の人の琴線にはうつすら触れ、残りの人も自分とそんなに遠い話ではないのかな程度には聞いていたなあ、ということころ。服を実際に着てみよ

うとここのちからからの呼びかけに關してはのりのいい男子数名が反応し、お互に冷やかしながら高橋の袴風パンツや、本間持参のインドネシアの民族衣装など（似合つていなかったが男子諸君は巻きスカートなのでいやがる）を着ていた。女子は関心は少しはあるようだったが、恥ずかしさが先に立つようで嫌がった。（企画者の中には「生徒に強制的に服を着せる」ということに抵抗を持った人もいたようだつたが）私としては着ることを勧めはしたが、嫌がる生徒には強くは言わなかつたし、やっぱり恥ずかしがるか、という程度。

高校生にワードローブを（頼まれてもいいのに）公開し、自分がなぜこの服を気に入っているかを彼らに分かつてもらえるように話すというこの奇妙な経験についてはいろいろ考えたことはあったと思うのだが、今回のメインの課題である「ジェンダー」（に対する感覚、意識）を衣服を教材として伝えるということがうまくいったかどうかについてだけ簡単に振り返つておく。



高校生くらいの年代の人に対することが多い某研究室関係者（田中さんです）からは、今回の話に多く登場した、コムデギャルソンなどの服は「思想性が強いので、高校生には難解だらう」というような御指摘をいただいた。これに関しては私自身は「既存の女性性への抵抗」というような物言いまでいつてしまふと確かに難解だけれども、私たちが実際に服を選ぶときには、女人の人でもパンツしかはかないとか、知らず知らずにフリフリのものばかり選んでいる

といつように、感覚の中に込められた方針のようなものがあるし、女、男らしさへの違和感（あるいは執着）みたいなものを感覚レベルで理解したり、伝えることはできると考へていて。そもそもそのものへの違和感（や執着）はそもそも感覚レベルで起きていているはずであり、その感覚を解きほぐしていくなかで「ジェンダー」という概念も初めて姿を現すのではないかだろうか。

「ジェンダー」に対する感覚、意識について学生達に考へてもらつ教材としての衣服を用いるといつことに関しても、もっと戦略を練つて「ストーリー」を作り丁寧に説明すること、相手を引き込む話術があれば、ある程度は有効な教材として使えるのではないかと考えていて。（高校生ではないが、私が他のところで行つた専門学校生相手の授業では、わりと使えると感じた。）

（余談だが、専門学校生の授業の感想から見て、服に込められたジェンダー的なものを批判的に取り出すことは、一部の女子学生には比較的簡単だが、男子生徒にはさらに難しいようだった。そもそも女性の方が見られている自分というのを普段から意識しやすいし、男性は多くの人がそのようなことを強いられない？ということで理解度が若干性別によって偏るのかもしれない。）

高校生に限らず、自分よりも年下の学生にジェンダーの話をするときにつくづく感じるのは「男らしさや女らしさに抵抗を覚える」というのはまだ（ということ）である。時代でも）マイナーな発想なのだなあ、ということである。ということはつまり、「男らしさや女らしさに抵抗を覚える」とか「一般的な身体の美的基準で測られるのはおかしい」といった発言は、理解しがたい、奇妙なものとして半数かそれ以上の生徒に受け取られる可能性があるということであり、うまくいけば「へえ、そんな考えたもあるのか」ということになるが、失敗すれば「そんな風に考えたことないし」とつっぱねられるか、こちらの一方的な道徳的お説教になつてしまふということである。

それとは違つ考え方もあるといつことをどうやら理解してもらえるのだろう 福井高校の授業から、私に与えられた宿題は、いわゆる「既存の枠組み」にそれほど抵抗を感じないまま大きくなり、自分と違う考え方をする他者にあまり出会つた経験のない学生達たちにマイノリティ（社会全体にとつての他者？）の考え方（フェミニズムや障害学など）を伝える方法を考えるといつことである。

ただ「若者だからファッショնに关心あるだろ」というような安易な思いこみではうまくいかないといつことも同時に感じた。（前述の某関係者、田中氏からの指摘にはこれ以下のポイントに関係するところもあると思われる。）学生の中には服なんてべつにどうでもいい、楽だったらいですという意見も多くあつたし、女らしさや男らしさにあまり疑問を抱かないという保守的なマジヨリティーにくみする？考え方の人も多かつたようと思つ。

そもそも、マイノリティの考え方を理解するとはどういうことなのか。なぜマイノリティの考え方を彼らに伝えなければならぬのか。これに関して今私が思いつく答えは

一つしかない。それはマイノリティ（他者）の考え方を理解することは、ちがうやり方で考え、生きている他人を（無視、拒絶するのではなく）理解できる態度を身につけるということであり、私は他者を理解する態度を身につけるということが生徒達が社会で生きていく上で必要だと考えるからである。

学校、授業といった枠組みのなかで「他者に出会い」ということがどれだけ実現できるか、というのはこの福井高校プロジェクト自体の課題であるとも思うが、（衣服など魅力的な教材を工夫すること、対話技法の導入などを含めて）それが生徒達にとって苦痛でない形で、楽しく実現できる方法をなんとか考えてみたい。（たかはしあや）



「着なさい」と「着てみよう」のあいだ

本間直樹

服装について言及したり、言及されたり、「着なさい」と言われることというのはとてもデリケートな事柄だ。自分が他人にどのように見られているかということにセンシティヴなるのは自然なこと。そこに教室という場所とコンテクストが加わるとなおさらだろう。学校という空間は「着てみよう」を「着なさい」に変換する。さもなくば「先生」とすら見なされないし、「無視」で応接される。それを実感した。人によっては「先生」をうまく演じきってこの変換を見えなくする。それは必要なことだ。だが哲学はどうなのだろう？（ほんまなおき）